

主 題：揺るがされぬ生涯を送るために2

聖書箇所：ピリピ人への手紙 4章5節

私たちはイエス・キリストを知りキリストにあって救いへと導かれて、神との和解、神にある平安を得ることができました。神との間に存在していた、私たちの罪のゆえの神との敵対関係がイエス・キリストへの信仰によって解消されたのです。みことばは私たちに教えます。私たちがキリストを信じることによって手にしたこの平安というのは、私たちの霊的な関係においてのみ存在するものではなく、私たちの毎日の生活の中で体験することができる、実際に満たされて行くものであると。それゆえに、私たちは新約聖書にある様々な手紙の中で、「平安」または「平和」ということばを見ることができるのです。パウロはその手紙の文頭、また最後に「神の平安があなたがたとともにあるように」と記しています。なぜなら、私たちがその平安を体験し、実際に手にして、この地上での生活をしっかり生きて行くことができると彼らが知っていたからです。また、それを望んでいたからです。イエスご自身は同じように私たちに約束してくださっています。**「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」**（ヨハネ14：27）。

ではなぜ、私たちはこの平安をもって地上の生活を歩むことが少ないのでしょうか？なぜ私たちの心は平安に満たされるのではなく、むしろそれ以上に、心騒ぎ、不安に満ち、思い煩うことがたくさんあるのでしょうか？いったいどのようにすれば、その代わりに平安を体験することができるのでしょうか？前回から私たちはこの答えをパウロのことばから学び始めました。パウロはピリピ人への手紙4：4-9のところで、私たちにどのようにすれば平安に満たされた生涯を送ることができるのかを教えています。いくつかの命令が与えられています。それらを通してパウロは私たちがどのような状況にあっても、揺るがされることなく、この地上での生涯を平安に満たされて生きて行くその方法を教えるのです。秘訣です。4-5節では私たちが平安に満たされた生涯を送るために必要な条件を教えています。6-7節では実際に私たちの前に不安をもたらすような状況が起こり、私たちの心が思い煩い始めたとき、どのようにしてそれを解決すればよいのか、その方法を教えます。そして、8-9節でそのような思い煩いを解決した私たちがその後どのように生きて行けばよいのかを具体的に教えるのです。

どのようにすれば平安に満たされた生涯を送ることができるのか、前回に続いてパウロのことばから学んで行きましょう。そして、それらを通して私たち自身がどのような状況の中でも心安らかに生きて行けるようにと願います。

平安に満たされた生涯を送るための必要条件**1. 聖書的喜びをもつこと 4節**

前回はその1番目の条件を見ました。4節には「**いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。**」とあります。聖書的喜びの定義は「喜びは感情ではありません。喜びは神が信徒の最善のため、ご自身の栄光のためにあらゆる事柄を支配しておられるということ、それゆえ、どのような状況にあっても、すべては万全であると根底から確信すること」でした。私たちは神から与えられている豊かな平安を体験しながらこの地上の生活を全うすることができるのです。たとえどのようなことが起こっても、神は私の最善のためにそれを与えてくださっている、神の栄光が最も現わされるために今私の前に置かれていると確信しているのです。このような確信が私を支配しているから、私たちは不安になることがないのです。なぜなら、すべては良いことのために起こっているからです。平安に満ちて生きて行けるのです。もし、私たちの心にこの聖書的喜びが存在しなければ、私たちは決して平安に満ちた生涯を送ることはできません。けれども、必要な条件はこれだけではありません。パウロはもうひとつの条件を挙げています。それが5節に書かれています。

2. 寛容な心が必要である 5節

パウロは言います。「**あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。**」。この5節は、よく知られているみことばである4節と6節に挟まれて目立たないのですが、パウロは大切なことを私たちに教えているのです。まず、この「寛容」ということばの意味を考えましょう。

(1) 寛容とは何か？

多くの学者たちが同意することですが、「寛容」を訳すことは難しいのです。その意味合いが広く深いからです。このことばには「優しさ、しなやかさ、親切、忍耐強さ、寛大さ、慈悲深さ」という意味がすべて要約されており、「適切である」が語源なのです。「ふさわしい、値する」といった意味をもつこ

とばです。そして、そのことばを基にここで言われていることは、「過度に厳密な判断をしない」ということです。たとえば、このような状況の中でこのことばが使われました。王様やさばきをする立場にある人が、法律に基づいて判断するのですが、そのときに法律だけに目を向けて他のことを一切考えずにさばきを与えることをしないときです。つまり、相手がなぜこのようなことを犯したのかその事情をよく吟味し、それを理解しようと心から努めること、また、その状況に基づいて法律を適用させてさばくこと、そのことを言うのです。このことばは新約聖書では余り多く使われることはないのですが、パウロはⅠテモテ 3：3 で教会の長老の条件の一つとしてこのことばを挙げています。「**酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、**」。また、Ⅰコリント 10：1 では「さて、私パウロは、**キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします。私は、あなたがたの間にいて、面と向かっているときはおとなしく、離れているあなたがたに対しては強気な者です。**」と、寛容はイエス・キリストがその生涯の中でもっておられたこととして挙げています。この「寛容」ということばを分かりやすく説明されたものを見つけました。それは「他の人たちの手によって私たちの上にもたらされる虐待、困難、それらに忍耐をもって堪えること」です。これは「寛容」という意味の前半部分です。後半部分はあとで説明します。どのようなことを私たちがされたとしても、私たちはその人たちに忍耐をもって対すること、それがパウロの言わんとしていることなのです。この最たる例をイエス・キリストに見ることができます。特に十字架の上でイエスが語ったことを見たとき、そのことがよく分かります。ルカ 23：34「**そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。**」。事実、聖書を見ると、このイエス・キリストこそ私たちがもつべき寛容の模範であることを教えられるのです。ペテロもまたこのように言います。「**あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。：22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。：23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。**」。キリストはその生涯を通して私たちに模範を示してくださったのです。困難が与えられたときに私たちが忍耐をもってそれらを堪えること、それをもたらす人たちに忍耐をもって接することです。それが「寛容」ということばの持っている意味なのです。この「寛容」をもつことがなぜ私たちにとって重要なのでしょうか？なぜそれが私たちに平安をもたらすのでしょうか？それを考えることもまた大切です。それが分からなかったなら寛容をもって励もうとしないからです。

(2) なぜ寛容が重要なのか

ある注解者は寛容によってもたらされる祝福についてこのように言います。「ほんとうの祝福というのは自分が受けるにふさわしいこと、自分が受けて当然であるとするそのことを追い求め続け、何としても手に入れようと考えている人には与えられない」と。このことばに照らすと、私たちが今生きている社会は本当の祝福を得ることはできないものです。私たち人間は皆、この社会にあって自分が受けて当然なことを追い求めているからです。何か不当な扱いを受けたとして、私たちはその仕返しをしたいと思います。なぜなら、受けるに当然な分を受けていないからです。だから、日本においても裁判になることが非常に増えてきました。不当な仕打ちを受けたときは、その報いを求めるからです。それが当然である、そうしないと気が済まないのです。けれども人が、私が見るにふさわしいと考えていることを追い求めてそれを手に入れようと一生懸命努力し続けるなら、そこには苛立ちや不安や苦々しい思いしか残りません。なぜなら、私たちが得て当然だと思っているものをすべて手に入れることはできないからです。多くの場合、私たちが得て当然なものは実は得ているのです。けれども、私たちが考えていることと私たちにふさわしいものとは違うのです。だから、自分が受けて当然だと思ふものを追い求めるのです。自分は幸せになって当然だ、今までこれだけ苦労したのだからその報いがあるって当然だといって、それを起こさない人に憎しみを持ち、不幸を与え続ける人たちに恨みを抱くのです。手に入れることができないものを他の人が持っている、それは不公平だということです。このように生きて行くなれば、私たちの心の中に満ちてくるのは平安と反対の思いです。苛立ちと恐れと不安と、人に対する怒りや恨み、そのようなものしかありません。

私たちの人生には困難がつきものです。ピリピの教会の人たちにもそれがありません。ピリピ書の前半部分を見て行くと、ピリピ教会の人たちが福音のゆえに人々から迫害を受けていたことが書かれています。1：27－30を見るとよく分かります。「**ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、：28 また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。：29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。：30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。**」

この人たちに対してパウロは言います。あなたには選択がありますよと。人々があなたに対して困難をもたらすとき、あなたは自分が受けて当然だと考えることを一生懸命追い求めて、苛立ちや苦々しさに満ちた生涯を送るのか、それとも、それを忍耐をもってそれをもたらす人たちに接することによって平安に満ちた生涯を送るのか、どちらかの選択があるのだと。そして、そのことを私たちにもパウロは問うわけです。キリストは彼の上に困難、迫害をもたらした人々に対して、愛することを実践されました。そして、私たちにもそれをしなさいと命じておられるのです。山上の説教の中で「あなたがたの敵を愛しなさい」と言われました。マタイ 5：44 **「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」**と、あなたがもし天国に属する者であるなら、神の御国に入るにふさわしい者であるなら、あなたがすべきことは「あなたの敵を愛すること、あなたを迫害する者のために心から祈ること」だと言われるのです。これはしてもしなくてもいいものではなく、私たちがすべきこと、天国民としての責任なのです。私たちは自分が受けてふさわしいと思うことを追求し始めるときに、簡単に苛立ちを覚えます。それが与えられないことが多いからです。怒りの思いをもち、憎しみをもち、苦々しい思いが心を満たすのです。そしてそのとき、私たちは大切なことを忘れるのです。私が今、与えられて当然であると考えていることが、与えられないことは最善であるということです。神はすべてのことを支配しておられるのです。神が与えないということはそれが万全であり、最善なのです。それが最も私にすばらしいことであり、神の栄光が現わされることなのです。神の最善を忘れてあくまで自分が受けて当然と思うことを追求するなら、心の中には平安が生まれて来ないのです。神の最善が与えられていること、キリストはこのことを自ら模範として示してくださったのです。

キリストに属する者は愛することが命じられています。キリストは彼の上に困難をもたらしたすべての人に、忍耐と寛容をもって接しられました。なぜなら、彼らを愛されたからです。44節のすぐ後にイエスはこのように言われています。46節 **「自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしてはいませんか。」**と、あなたが愛さなければならぬ人は、あなたを憎む人だと言われるのです。愛したいと思う人を愛するだけでは十分ではない、神の国に属する者は、あなたを憎む者を愛そうとするのだと。パウロはⅠコリント 13：4、5で愛をこのように説明しています。**「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。：5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、」**、この「寛容」を直訳すると、忍耐をもって困難を受け続けることです。私たちにはこのことが命じられているのです。そして、このことを実践して行くときに私たちは平安に満ちた心を生み出すことができるのです。私たちが困難を覚えているときに、それをもたらす相手に対して、最善を行いたい、その人たちが喜ぶことを行なってゆきたいと心から願っているなら、私たちの心には平安が満ちるのです。だから、私たちには寛容が必要なのです。愛をもって人に接することが私たちに求められているのです。その愛が私たちの生涯に溢れてゆくときに、私たちの心には苛立ちや憤りの代わりに、平安がどのような状況の中でも満ちて行くのです。では、どのようにすればこの平安を実行して行くことができるのでしょうか？どのようにして寛容を示して行くことができるのでしょうか？

(3) どのようにして寛容を現わすのか

自分に嫌なことをする人たちに忍耐強く愛をもって接することは難しいことです。けれども、パウロはこのペリピ書で非常に興味深いことを言っています。どのようにして私たちはこの寛容を行なってゆくのか？ **「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。」**とパウロは言っています。「知らせなさい」ということばは直訳すると「(すべての人に)知られなさい」と受身なのです。あなたがたの寛容が知られないといけないのです。パウロがここで言うことは、単に嫌なことが起こったときに我慢しなさい、堪えなさいと言っているのではなく、もっと深いことを言っているのです。いろいろな苦しいことをもたらす人がいるとしても、その人たちに悪い思いを抱かないように、悪いことをしないように、その困難に対して耐え忍び続けなさいではなく、寛容を知られるように、それが見えるようにしなさいと言うのです。どのようにして見えるのでしょうか？パウロは私たちに言います。私たちの周りで私たちの生活を見ている人たちが、私たちに困難をもたらす人たちに私たちが愛をもって接していることが、はっきり目に見えるように形にして現わして行きなさいと。そのようにして寛容が見られるのです。人々に対して、その人たちの徳となることを私たちが熱心に行なって行くことです。聖書的愛に基づいた寛容というのは、常に具体的な形で現われるのです。その人たちに最善になることを願って実践して行くからです。寛容とは私たちに困難をもたらす人たちに対して忍耐強く接することだと言いましたが、どのように忍耐強く接するのか、聖書的愛のゆえに、その人たちの最善となること、それを切に実践し求め続けながら、忍耐強く接することです。

ダビデは詩篇 37：7、8で **「主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。：8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ**

悪への道だ。」と、私たちに悪を行なう者たちに対して悪をもって報いるなら、それは私たち自身が悪の道を進んで行くことなのだとはっきり警告するのです。それゆえに、新約聖書においても多くの著者は私たちに同じ警告を与えるのです。パウロはⅠテサロニケ 5：15で「**だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。**」と勧告しています。ペテロは同じようにⅠペテロ 3：8，9でこのように言っています。「**最後に申します。あなたがたはみな、心をつにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。：9 悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。**」と、これが私たちがどのようにして寛容を示すかという具体的な例です。罪に満ち溢れたこの世界にあって間違いなく起こることは、人々が皆さんを傷つけることです。意図的であろうとなかろうと必ずそのことは起こるのです。私たちは罪人だから、自分中心に生きようとするからです。そのようなことに何度も出会いながら私たちはこの地上での生活を生きて行きます。そのとき、私たちは何をするのか、どうしなさいと聖書は私たちに教えているのかというと、困難、迫害をもたらす人たちに愛をもって最善となることを行いなさいということです。パウロはこのことをローマ人への手紙の中でも記していました。ローマ 12：17「**だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。**」と、この「図りなさい」ということばは「あらかじめ考えておく、物事が起こる前にもう決めておく」ということです。あらかじめ決めている「善をしよう」と思うその行為に基づいて善を行なって行きなさいと。それが私たちが定めておくべきこと、やらなければいけないことなのです。寛容な人というのは何をするのでしょうか？その迫害を忍耐強く我慢するだけでなく、あらかじめ定めたことを行なってゆこうとするのです。パウロは私たちが復讐をするのではなく、怒りを心に蓄えてどのようにしてこの受けた被害にふさわしい悪を行なうのか、報いを彼らが受けることを考えて行動するのではなく、彼らの最善、喜ぶことを考えて実践して行くことだと言うのです。パウロはその後に18節「**あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。**」と興味深いことを記しています。すべての人と平和を保つことができるように、自分の心に心を配りなさいと言うのです。平和というのは相手があることです。もし、私たちが平安に満ちた生涯を生きようとするなら、私たちが内側において相手に対する平安をもっていなければ平和を得ることはできません。私たちは決めておかなければならないのです。誰が何をしたとしても私はその人に対して最善のことを行なってゆきたい、それを実践するのだと。そのことを私たちが身につけて行なってゆかない限り、その準備ができていないかぎり、私たちは平安を体験することはないのです。誤解してはいけないことは、これは罪を責めないということではないということです。なぜなら、相手にとって最善なことは罪が責められることでもあるからです。けれども、私たちは罪を責めるという名のもとに、相手に復讐をしてはいけないのです。残念ながら多くのとき、私たちがみことばをもって人を責めるとき、そのみことばによって復讐しようとし、赦す準備ができていないのに、私たちはみことばを使うのです。私たちが罪を責めるのは和解をしたいからです。罪が責められてその人が悔い改め、神との和解を回復し、兄弟姉妹との和解を回復するために行くのです。もしその準備ができていないなら、私たちはまず自分の心の内側に平安を保つことができるように、自らの罪を悔い改めることです。どのようにして私たちは寛容を実践するのか、愛に基づいた行動をもって現わすのです。相手にとって最善のことを計画しそれを実践することによって人々に知ってもらうのです。だれに知ってもらうのでしょうか？それが4番目のことです。

(4) 寛容を行なう動機とは？

パウロのことばを見ましょう。「**あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。**」、**「すべての人に」**とあります。例外なくだれに対してもです。イエスはそうされたからです。イエスは自らのいのちを奪った者に対して寛容を示し、その寛容をもって私たちを愛されたから、私たちもそのようにするのです。すべての人にこの寛容を向けること、それが私たちに与えられた責任です。

パウロは最後に「**主は近いのです。**」ということばを加えています。これは私たちがこの寛容な心を実践して行かなければならない理由として挙げられているのです。なぜ寛容であるべきなのか、その動機はどこにあるのかを教えるのです。パウロは言います、「**主は近い**」と。このことばはふた通りに考えることができます。神が場所的に近い、つまり、私たちの周りにいてくださることと、時間的に近い、すぐにやって来てくださるというそのことです。もし、場所的に近いと考えるなら、このことばは6，7節に付随するものでしょう。けれども文脈を見て行くと、時間的に近いと考える方が正しいことが分かります。なぜなら、3章でイエス・キリストがやって来るそのことを話しているからです。いつの日かキリストにお会いしたときに与えられるその復活のからだを彼が切望していること、そして、そのキリストの現われを私たちが待ち望んでいることを3章でもう話して来たのです。ゆえに、「**主は近い**」と言ったときにパウロは何を考えたのか、イエスがやって来る日が近いのだと言ったのです。ではなぜ、それが私たちの動機になるのでしょうか？一つはその時に私たちの思い煩い、困難が取り去られるからです。

そのときがもうすぐにやって来るから、もうしばらくの間、最善が与えられるその時まで待ち望みましょうと言うのです。同時に、このキリストの再臨は私たちにほんとうのさばき主が、人々の行動を正しくさばいてくださるそのことを教えているのです。なぜ寛容をもって人々に接するのか、さばきは私たちのものではないからです。私たちに命じられているのは、人に報いを与えることではなくて、人を愛することです。だから、パウロはローマ12：19でこのように言っています。**「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」**人々は私たちに様々なことをします。悪意をもってすることもあれば、そうでないこともあります。その人たちが何を考えて何をするのか、私たちにその心の中まで探ることはできません。私たちの判断は残念ながらいつもどこか間違っているものだからです。私たちがすることはその人を愛することです。そして、さばきは主に任せるのです。

皆さんは寛容を実践しておられるでしょうか？私たちは考えなければなりません。私たちが寛容のある生涯を生きることがなければ、私たちに平安は与えられません。

1953年10月に、一組の宣教師のカップルがエクアドルのキトという町で挙式をしました。このカップルの名前はジム&エリザベス・エリオットです。このジムは若い頃から福音を伝えたいという熱い思いに駆られ、特に、一度も福音を聞いたことのない南米のジャングルに住む部族たちに福音を伝えたいと願っていました。その機会が1955年秋に与えられました。結婚してわずか2年でした。この地にはアウカインデアンという部族がいました。この部族は非常に暴虐であることで知られていました。南米の地で石油が発見されて、石油カンパニーの一つシェルが調査員を派遣した時、この部族と出会いましたが、一瞬にして皆殺されました。彼らの特徴は自分の部族以外の者に出会うなら、彼らを殺すことでした。この人たちに対して、ジム・エリオットを含めた4人の宣教師たちは重荷をもっていました。1955年の秋、彼らの仲間のパイロットがジャングルを飛行していた時、その部族の部落を見つけました。そして、そこを通るたびに贈り物を落とし続けました。ある日、準備ができたと思い、その部落の近くにあった川辺に飛行機が着陸できる場所を見つけて、そこにテントを張ったのです。何日かの搜索の末、ついに彼らは3人のアウカインデアンたちと遭遇できました。一人の男性と二人の女性です。そして、彼らと話をすることができました。そのことを喜んだ彼らは、1956年1月8日、この部落へと入って行くことを決心したのです。キトの町にいた彼らの妻たちに、ラジオ無線によって彼らはその日連絡をしました。これから行く、祈っていてほしい、4時半に帰ってきてまた無線で連絡するからと。そして、彼らは出て行きました。4時半になりましたが無線はきませんでした。その後も無線が来ることはありませんでした。搜索隊が出されて大規模な搜索が行なわれましたが、6日目に彼ら4人の死体が川辺に転がっているのを見つけたのです。人生に困難をもたらす人たち、皆さんが彼らの妻であったら、またその家族であったらどうされるでしょう？何を考えどのような行動をとるでしょう？ある人は神に怒りを抱くかもしれません。あなたのために働こうとしていたのに、神様なぜこのようなことをなさるのですかと苛立ちを覚えるかもしれません。ある人は自分の主人を殺したその部族の人たちを憎み怒りをもって生き続けるかもしれません。けれども、寛容を実践するクリスチャンはそのような思いをもって生きないのです。それがジム・エリオットの妻エリザベス・エリオットだったのです。彼女は夫の死後もエクアドルに留まりました。キトで始めた働きに従事したのです。神は不思議な方です。エリザベスのもとに二人の女性を遣わしました。このアウカインディアンの女性です。彼女たちとしばらくの間一緒に住みことばを学び、彼女たちに福音を伝えることをしたのです。ある日、彼女ともうひとり殺された宣教師の妹と、ジムとエリザベスの間に生まれた2歳の女の子を連れてふたりのアウカインデアンと一緒に彼らの部落へと入ったのです。彼らはそこで2年間働きをしました。ことばを学んでみことばを伝えて行くとき、この暴虐さで知られたインデアンたちは外の世界と和解を始めたのです。そして、救われる人がたくさん起こされました。何よりも神はすばらしいと思うのは、彼らの中で牧師になる人が生まれたのです。だれでしょう？ジム・エリオットと他の3人の宣教師を実際に槍で殺したその人が、牧師として立てられたのです。

寛容、皆さんもっておられるでしょうか？私たちがエリザベス・エリオットのような状況に置かれることはまずないでしょう。けれども、もっと身近なことで私たちには寛容を示す機会が備えられているのです。皆さんに困難をもたらす人々に愛を与えようとしておられますか？最善をなさようとしておられますか？平安な心に満たされておられますか？もし平安がないとするなら、皆さんに困難をもたらす、不都合をもたらす、喜びを与えようとしない人たちに対して寛容を示していないからかもしれません。パウロは言います。私たちが平安をもって生きるために、私たちには聖書的喜びが必要だと。そして、聖書的な忍耐強さ、寛容が必要であると。そのような寛容をもって生きるとき、私たちは準備ができているのです。神からの平安を実践して生きることです。